

層上には遺物包含層が無く、直接水田床土が重なるが、土層の堆積状況からみて、この砂層は大路路面に敷いていたものと考えられる。

路面上の遺構としては、側溝寄りに約2.5m間隔に2条の平行する斜行溝と、斜行溝の西に近接してトレンチ南壁に掘立柱の掘形と柱抜取穴を検出した。いずれも砂層下の灰黄粘土層上面を切込み、斜行溝内埋土は上層の灰色砂と同じである。斜行溝は溝肩が垂直に切込まれている個所が多く、車の輒痕跡とも考えられる。

掘立柱の掘形、抜取穴ともに砂の混入ではなく、したがって、掘立柱は路面上に砂を敷く前の路上施設の一部かと考えられ、輒跡は砂を敷いた後の痕跡であろう。

朱雀大路東側溝 溝幅約3.6m、深さ約0.4mの素掘り溝で、底面は平たく、側壁の勾配も緩やかである。大路路面と側溝東側の築地基底部では高さを異にして、路面の方が約40cm程高い。この高低差は、路面から溝肩にかけての緩かな傾斜で処理している。

溝埋土は上・下2層に分れるが、ともに自然堆積土ではなく、同時に埋立てられた土層と考えられる。遺物も少なく、流れた跡を留めないので、廃絶時に溝の底さらえを行ったのちに埋立てたものと思われる。

築垣 朱雀大路東側溝の東岸から水田の中央畦畔を含む6～7mの間は、遺物の出土量が少なく、畦畔の東2m幅には大路路面上と同じ黄灰粘土層を地山上に薄く敷いている状況である。黄灰粘土層は畦畔の西側ではなく、畦畔内で途切れています。畦畔内いっぽいに黄灰粘土層が及んでいるとみてもその幅は3.6mであり、大路側溝と坪内土壙間のちょうど中央に位置することから、黄灰粘土層は築垣積土の第一層または、基礎の掘込地業に相当する土層とするのが妥当である。したがって、畦畔はやや西に寄っているが、坊垣築地の遺存したものとすることができます。

土壙 発掘区の東端の坊垣築地内部は全面に土壙が拡がっている。土壙の深さは20～30cm程で浅いが、大小様々な大きさのものが重複を繰り返して、発掘区内全面に拡がった状況を示す。土壙内からは土器片が多量に出土して、その時期は奈良時代全般にわたっている。発掘区の位置が左京三条一坊二坪内の西南隅に位置していることを考え合わせると、これらの土壙群は、坪内の厨に近いごみ捨て場とみることができる。

III 遺 物

1. 土 器

土器は朱雀大路東側溝、土壙、包含層、包含層上面の溝などから出土した。

朱雀大路東側溝出土土器 (fig.10-2~4・7・8) 土師器と須恵器がある。

土師器：皿A 1点と杯または皿類と思われる小片1点がある。

須恵器：杯B 2点、杯蓋3点、皿A 1点、壺E 1点、壺K 1点がある。

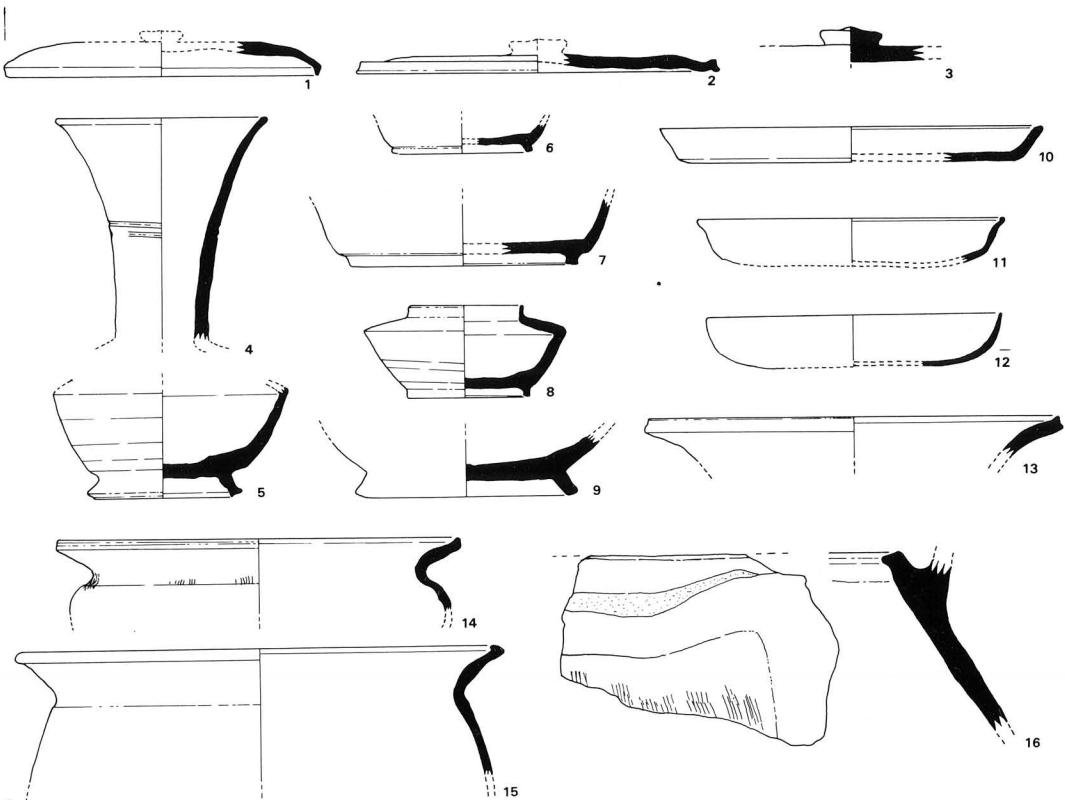


fig.10 朱雀大路東側溝ほか出土土器 1 : 4

杯蓋（3）はかなり大型の蓋に復原できよう。つまみの頂部は左まわりのナデ、他の天井部上面はロクロナデ、下面是ナデ調整。灰色を呈し、胎土は緻密で、焼成はやや軟質。

杯蓋（2）は縁端部が強く屈曲し、全体に低平で、頂部の上面から下面縁端部にかけてロクロナデ、下面中央部はナデ調整。青灰色で、黒色微粒子を含み、やや軟質。

壺K（4）はラッパ状に大きく開く頸部のみが残る。5のような体部につくものであろう。頸部中位に沈線をラセン状に1回転半めぐらす。紫灰色で、白色・黒色微粒子を多量に含み、器表はざらつく。焼成は硬い。口径11.4cm、現存長12.0cm。

壺E（8）は、通例みられる壺Eに比して器高が低く、偏平な感じを与える。ほぼ完存する。底部外面はヘラ切りのまま、体部下半をロクロケズリとするていねいな作りである。青灰色で、緻密な胎土。硬質。口径6.1cm、高さ4.8cm。

杯B（7）は青灰色で、胎土に黒色微粒子を多量に含み、硬質である。

東北隅土壙出土土器 (fig10-10・11・15) 土師器と須恵器がある。

土師器：杯A 1点、皿A 1点、甕4点以上がある。

杯A（11）は底部の大部分を欠く破片で、口縁部は強く屈曲し、端部で内側にかるく巻きこむ。暗文はない。器面が荒れ細部の手法は不明である。赤褐色で、胎土は精良、焼きはもろい。口径16.4cm、深さ約2.6cm。

甕（10） は口径26.0cmの大型の甕である。口縁部はくの字形に外反し、端部は、小さく内側に肥厚する。保存が悪いため、体部下半にナデを認めるほかは手法を観察できない。赤褐色ないし暗褐色を呈し、白色砂粒を多量に混え、軟質である。

須恵器：杯B 3点、杯蓋1点、皿C 2点、平瓶1点、壺E 1点、甕3点以上がある。

皿C（10） は平らな底部に直線的に開く短かい口縁部がつき、端部は内斜面をなす。保存不良で手法は不明。灰白色を呈し、胎土に細砂を含み、焼きはもろい。口径20.4cm、高さ1.8cm。

大土壙出土土器 土師器（甕1点）・須恵器（杯C 1点・甕2点以上）・瓦器がある。いずれも小片で図示することができない。

包含層上面に掘り込んだT字形の溝（溝I）および2条の東西溝（溝II・溝III）から土器が出土している。

包含層上面溝I出土土器 (fig.10-12・14・16) 土師器と須恵器がある。

土師器：杯A 1点、皿A 1点、甕1点、カマド1点がある。

杯A（12）は底部中央を欠く小片である。保存が悪い。橙褐色で、白色微砂を含み、もろい。口径15.8cm、高さ2.8cm。

甕（14）は口縁部から肩部にかけての破片で、口縁端部が上方につまみあげた形をとる。残りが悪く、わずかに頸部に縦方向のハケメを認めるほかは、内外面とも手法は不明。黒褐色で一部赤褐色を呈する。口径21.6cm。

カマド（16）は、前面焚口の向かって右半部の小片である。外面に縦方向のハケメを残し、他はナデで調整。外面は橙褐色、内面は暗褐色で、煤が付着し、使用の跡が歴然としている。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は軟質。

須恵器：杯A 1点、平瓶1点、甕3点以上がある。甕（13）は口縁部のみの破片で、口径22.0cmに復原できる。外面は灰褐色、内面は暗灰色で胎土に砂を多量に含み、焼きはきわめて硬い。外面に細かい降灰がみとめられる。

包含層上面溝II出土土器 (fig.10-6・9) 土師器（甕1点）と須恵器（杯A 1点、杯B 1点、杯C 1点、壺または甕1点）がある。図示したのは須恵器杯B（6）と須恵器壺または甕の底部（9）である。

包含層上面溝III出土土器 (fig.10-1・5) 土師器と須恵器がある。土師器には甕2点、須恵器は杯A 1点、杯B 2点、杯蓋2点、甕2点、壺K 1点がある。須恵器杯蓋（1）と壺K底部（5）を図示した。1は直径17.0cm。

包含層出土土器 (fig11~fig14) 包含層からは大量の土器が出土したが、小破片のものが大部分を占め、個体数を示すことができない。土師器と須恵器が出土した。

土師器 (fig11) :杯A・杯B・皿A・高杯・椀C・鉢A・蓋・甕・カマドがある。杯A（22）は底部を欠く口縁部の小片である。口縁端部は内側に小さく巻きこむ。外面は全面にヘラケズリ、ヘラミガキを加える。内面はヨコナデで仕上げ、暗文はない。橙褐色で、

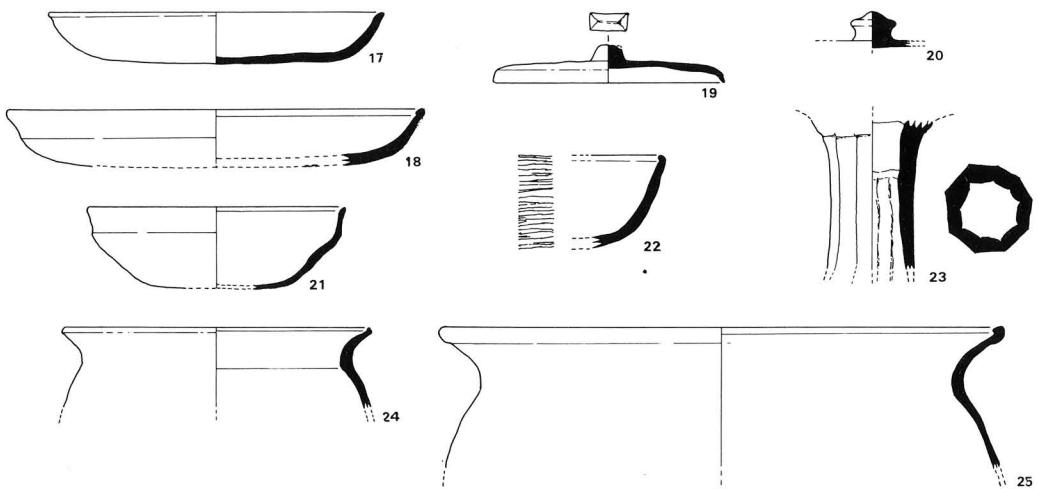


fig.11 包含層出土土器（土師器） 1 : 4

白色微砂を多量に含み、堅緻である。小片のため口径を復原することができない。皿Aは口径の大きなものと小さなものがある。大きなもの18は口径22.2cm、高さ3cm。口縁端部は屈曲し、巻きこむ。内面および口縁部上半はヨコナデ、底部外面は指圧痕が残り、不調整である。暗文はみられない。外面は白褐色、内面は白褐～茶褐色を呈し、胎土は精良で軟質の焼成である。小形のもの17は口径17.8cm、深さ2.8cm。口縁端部は巻きこまず、丸みをもつ。暗文をもたない。内面および口縁部外面はヨコナデ、底部外面は指圧痕を残したままである。椀C（21）は赤褐色を呈し、白色微砂を多量に含む。焼成はもろい。保存が良くないため、手法は不明。口径13.7cm、深さ4.4cm。蓋は一字文字状のつまみをもつ小型のもの19と高い宝珠つまみをもつもの20がある。19は、赤褐色を呈し、胎土に白色微砂を含み、軟質。保存は不良で手法不明。直径12.2cm、高さ2cm。20は橙褐色で、白色砂粒を含み、軟質の焼成。高杯（23）は脚柱部上半のみ残る。外面は縦方向のヘラケズリで9角に面をとり、内面はシボリメが残る。脚柱部は、棒を芯に用いない成形法によっていることが明らかである。橙褐色で、精良な胎土を用い、焼成は軟質。甕には大型（25）と小型（24）のものがある。25は口径30.2cm、口縁部は頸部からまるみをもって屈曲し、端部で内側へ巻きこむ。明褐色で、胎土に多量の砂粒を含む。残りがわるく、手法不明。24は、口径約6.5cmの小形のもの。口縁端は上方に小さくつまみあげる。橙褐色で、白色砂粒を含み、焼成はもろい。保存不良で、手法の観察はできない。

須恵器（fig 12・13）：杯A・杯B・杯C・皿A・皿B・皿C・杯蓋・椀A・甕・壺A・壺B・壺K・壺M・鉢A・鉢D・高杯・盤A・平瓶などの器種がある。

杯Aは2点図示した。37は、口径12.8cm、深さ4.0cm。底部外面はヘラ切りのちロクロケズリ。ロクロケズリは底部周縁にも及ぶ。灰青色で、白色微粒子を多量に含み、焼成は硬い。38は口径14.5cm、深さ3.6cm、底部外面はヘラ切り痕をそのまま残す。青灰色で、黒色微粒子を含み、硬質。

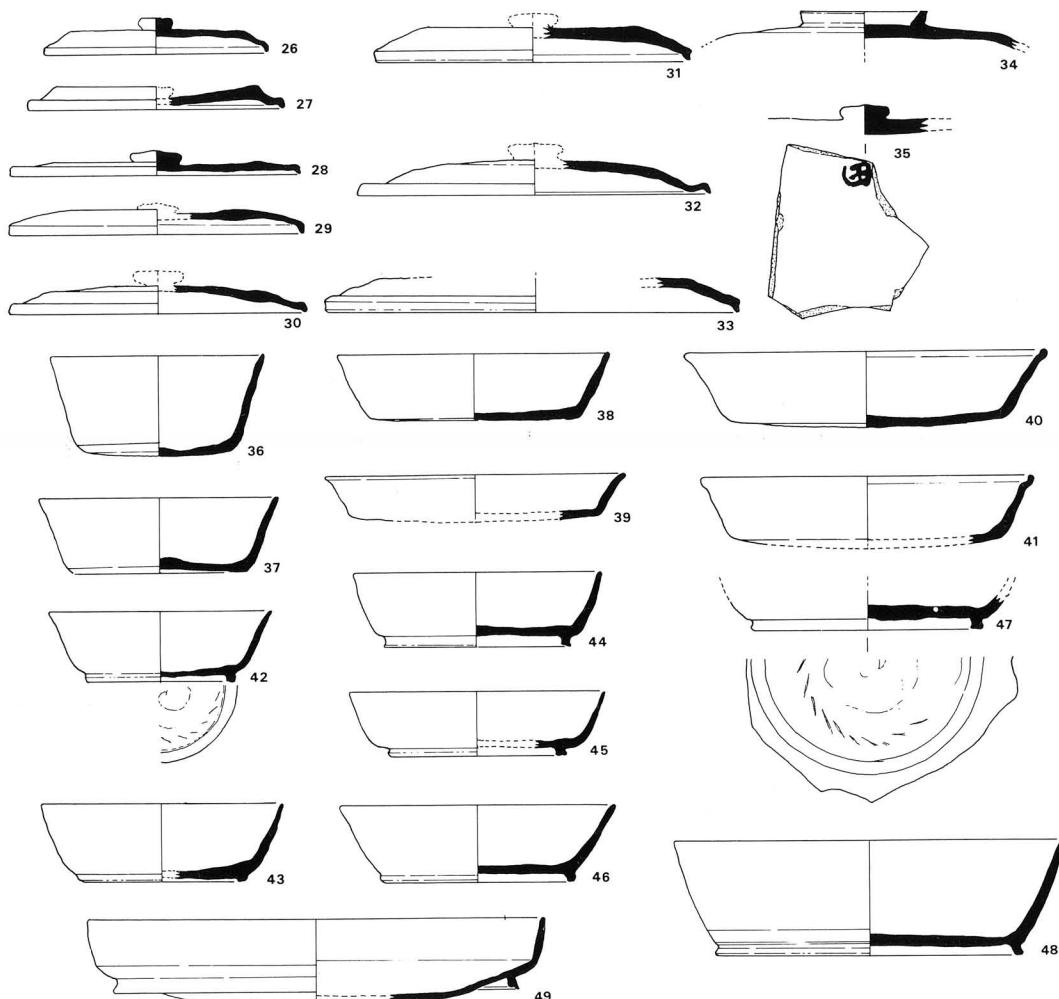


fig.12 包含層出土土器（須恵器）1：4

杯B(42～48)は7点図示し得た。口径からみるととくに大型の48を除いて、12cm前後から14cm前後のものである。43・46は高台が底部外端につき特徴的である。43は胎土に白色微粒子を多量に、黒色微粒子を少量含む。42・47・48には底部下面、高台の内側に瓜状の圧痕がめぐる。42は口径11.9cm、高さ3.8cm、43は12.9cm、深さ4.2cm、44は口径13.2cm、深さ4.0cm、45は口径13.6cm、深さ3.4cm、46は口径14.2cm、深さ4.1cm、47は高台径12.4cm、48は口径20.8cm、深さ6.0cm。なお、47は底部内面を硯に転用しており、器面がつるつるに磨滅し、墨が付着している。

杯C(40・41)は、土師器杯Aを模倣した形態である。40は口縁端部の巻きこみが小さい。いずれも底部はヘラ切りのままで仕上げる。40は口径19.4cm、深さ4.0cm、41は口径17.8cm、深さ約3.8cm。

皿A(19)は、口径15.9cm、深さ2.5cmほどに復原できる。

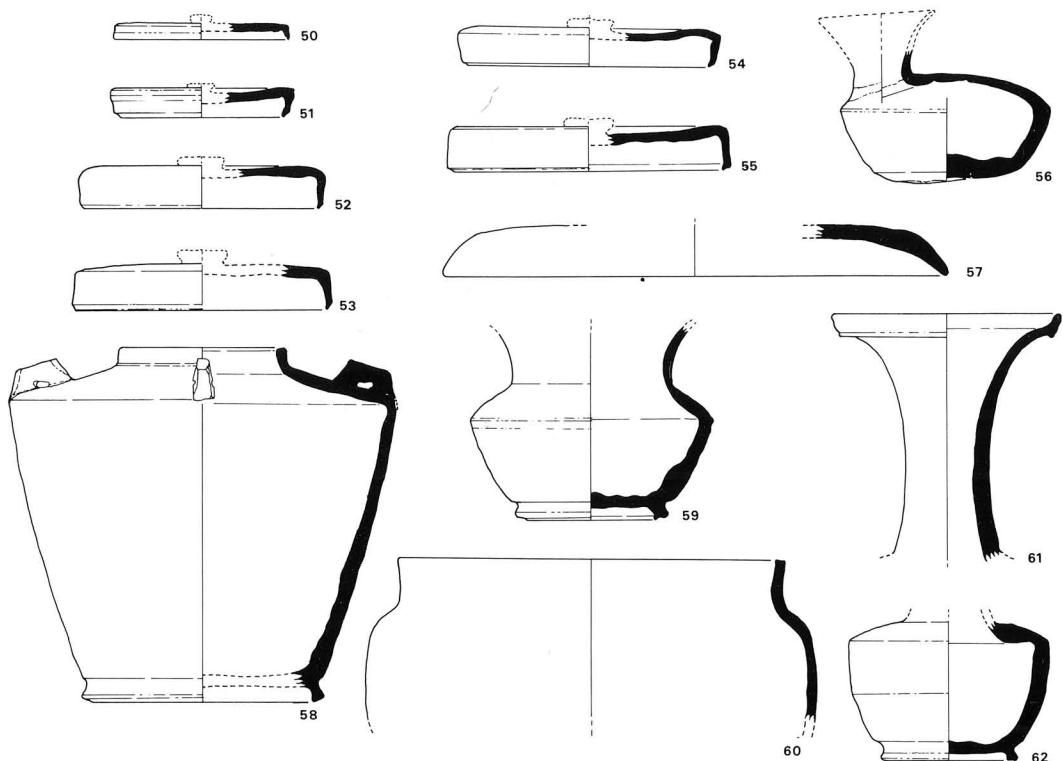


fig.13 包含層出土土器（須恵器） 1 : 4

皿B (49) は口径24.4cm、深さ4.5cmの大型品。広い底部が丸底ぎみになり、高台のとりつく位置が高い結果をまねいている。底部外面はヘラ切りのちロクロナデ。灰褐色を呈し、白色砂粒を少量含み、やや軟質の焼成。

杯蓋 (26~35) は、大半がつまみを欠く小片で全形を復原し得るものは少ない。直径は12.0cmから22.0cmのものまである。大部分は扁平な宝珠つまみのつくものであるが、34の如くあたかも高台を逆転させたかのような環状のつまみを有するものもある。天井部が高いものと低平なものがあり、縁端部も強く屈曲するものと屈曲しないものがあり、変異に富む。頂部の上面はヘラ切り痕をとどめるものが大部分を占め、さらにロクロナデを加える例も少数ある。33はヘラ切りの後にロクロケズリで調整。34にみられる環状つまみをもつものはこの1点のみである。縁端部が欠失しているのは措しまれる。杯Fに組み合う蓋と考えられる。天井中央部にヘラ切り痕をのこし、つまみ部分はロクロナデで調整する。つまみの外方はロクロケズリで仕上げ、内面はきわめて平滑である。全体にていねいな作りである。紫灰色を呈し、黒色微砂を含み、焼成は硬い。杯蓋のうち直径を知り得るものは26—12.0cm、27—13.7cm、28—14.5cm、29—15.7cm、30—15.9cm、31—16.9cm、32—18.9cm、33—22.0cmである。35の下面には「田」の墨書がある。杯蓋のなかには下面を覗に転用したもの (27・29・31) があり、いずれも器面がつるつるに磨滅し、墨が付着する。

椀A (36) は、口径11.4cmに対して深さ5.4cmと深い器形である。底部外面および底部

周縁をていねいなロクロケズリで平滑に仕上げる。灰色を呈し、胎土に白色・黒色の微粒子を含み、焼成は硬い。

甕（60）は、丸みをもった肩部に広口の短かい口頸部がつくもので、青灰色の地に暗青色の斑が入る。胎土に白色微砂を含み、焼成はやや軟質である。口径20.1cmである。なお、甕の体部破片には、外面が格子目文叩きで、内面の当て具が、同心円文にさらに平行線文のものが重複（平行線文が後）する例があり、土器製作技術上からも注目すべき資料である（fig.14）。これらは赤みがかった褐色をおび、胎土は精良で、焼成はやや軟質。

壺B（58）は肩に稜線のつく体部に短かい頸部をつけ、肩部に板状の耳をつける。ここでは仮に四耳壺として図示したが双耳壺の可能性もある。青灰色を呈し、白色砂粒を少量含み、焼成は硬質。内面は火ブクレが泡状に浮き出る。高さ18.9cm、口径8.9cm。

壺Kは口頸部（61）と体部（62）があり、それぞれ別個体に属する。61はゆるやかにひろがった口頸部が、端部で上下に拡張する。紫灰色で、白色細砂を多量に含み、焼成は硬い。外面に降灰が認められる。内面には漆膜が付着しており、この須恵器が漆の容器として用いられていたことが分る。口径12.2cm、現存高13.2cmである。62は肩が丸みをもった稜をなす体部で、これに長い口頸部がつく器形に復原できよう。青灰色で、胎土には石英等の砂粒を多量に含み、器面はざらつく。体部外面上半は粗いロクロナデで調整。現在高7.4cm。なお61の体部は、あるいはプラスコ形のものかもしれない。

壺Q（59）は、肩部が稜角をなす体部に、大きく外反する広口の口頸部を有するもので、外傾する高台を付す。底部外面はヘラ切り痕を残す。青灰～灰褐色を呈し、口頸部内面上半および肩部外面には窯内で灰がかぶり、器面が荒れ、ざらざらしている。胎土に黒色微粒子を含み、焼成は硬い。現存高10.1cm。

50～55は、壺A・壺Eなどの壺類の蓋と考えられるものである。いずれも宝珠状のつまみを有するものであろう。直径が9cm前後のものと、12cm～14cm前後のものと大きく2つに分かれる。それぞれの直径は、50—9.4cm、51—8.5cm、52—12.4cm、53—13.4cm、54—12.8cm、55—14.4cm。蓋の上面は多くのものが灰かぶりのため、手法の観察は困難であるが、観察し得たものについてはヘラ切りのまととするものが多く、一部は縁端部との境付近をロクロケズリするものが認められた。青灰色～暗青灰色を呈するものが殆どであり、55は暗紫色である。胎土は精良で、52・54・55には白色微粒子を含む。焼成はいずれも硬質である。57は直径27cmの大型の蓋である。部厚い天井部は縁端部に至り、薄く丸みをもっておわる。縁端部内外面はロクロナデ、他はナデ仕上。大型の皿Bのようなものの蓋かと考えられるが、決定的ではなく、また蓋ではなく皿である可能性も捨てきれない。

平瓶（56）は、口頸上半を欠くほかは完存する。提梁をもたず、高台もつかない古いたイプの平瓶である。底部外面はヘラ切り不調整である。灰白色ないし暗灰色を呈し、胎土には石英・長石等の砂粒を多量に含む。焼きは硬い。

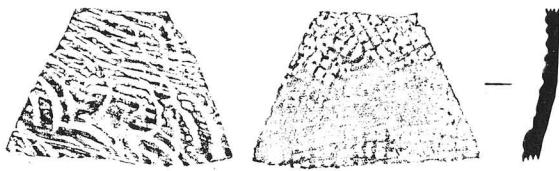


fig.14 包含層出土須恵器 1：3

小 結 この遺跡における土器の出土状況は、すべて2次的な移動を経たものである。つまり、本来の使用場所を離れたものであり、また出土遺構の年代を直接には示さない。このことは、今回出土の土器の性格を考えるにあたって最も留意すべき点である。まず、朱雀大路東側溝出土土器の場合は、溝としての機能を停止させる埋土に含まれていたものであり、この溝の年代を示さない。ここで注目したいのは、むしろ、築地の東側に検出された土壙である。土壙は後に若干の搅乱をうけているとはいえ、検出の状況からみて土器の本来の使用場所に近いことを思わせる。つまり、土壙出土の土器は、左京三条一坊二坪内の土器として扱うべきものである。

ところで、朱雀大路東側溝出土土器はどの場所から移動したものであろうか。これが朱雀大路の西側、すなわち右京三坊から移動したことは殆んど考えられない。やはり、もともと近い朱雀大路の東側、左京三条一坊二坪からの移動を考えるのが無理のないところであろう。また包含層の土器については、これらの土壙の上部の搅乱によって移動した土器を含むと考えられ、ことさらに遠距離からの移動を考える必要はないと思われる。

したがって、今回出土の土器は、すべて左京三条一坊二坪において使用された土器としてとらえることが許されるであろう。

このようにみた場合、出土土器の年代が8世紀のごく初めから後半までに納まるいっぽう、9世紀以降にくだる土器の皆無であることは、まさしくこの土器が平城京と命運を共にしたことを見出す。

出土した土器は土師器と須恵器からなる。いま改めてそれぞれの器種を列挙すると、土師器は杯A・皿A・椀C・高杯・蓋・鉢A・甕・カマドなど、須恵器は杯A・杯B・杯C・杯蓋・皿A・皿B・皿C・椀A・高杯・鉢A・鉢D・平瓶・壺A・壺B・壺E・壺K・壺Q・盤A・甕ほか、となる。用途にしたがえば、食器類、貯蔵用器類、そして煮沸用の土器にわたる8世紀における器種の大半を含むことが知られるであろう。このことはこの地域において長期にわたる生活のあったことを物語るものに他ならない。

器種の構成からは、これまで調査された宅地等の京内遺跡の土器と大きな差違はない。土器の中に転用硯の存在がやや目立つことは、今回の調査の出土土器の特色のひとつであり、また、「田」の墨書をもつ土器のあることも、この地の性格を考えるうえで手がかりを与えるかもしれない。しかし今のところその意味するところは判然としない。

2. 瓦類

瓦は整理箱約50杯分が出土。軒丸瓦5点、軒平瓦5点、施釉熨斗瓦1点のほかは丸・平瓦である。

軒丸瓦 (fig15・16-1・2)

6274Aa(1) 6274型式は藤原宮式の線鋸歯文珠文縁複弁8弁蓮華文軒丸瓦。内区全體が盛りあがり外区外縁の線鋸歯文が密にめぐる。A・Bの2種がある。Aの特徴は、弁区の盛りあがりがBより大きく蓮弁・子葉の反転が強い、中房の突出度が大、外区外縁の傾斜面と平坦面との境に凸線をめぐらすことなどである。Aはさらに中房の状況でAa～Acに細分できる。Aaは蓮子の周囲に低い円圏をめぐらす。Abは苞の磨耗が進み蓮子外周の円圏が消滅した段階で、弁の外周・間弁・界線などを彫りなぞる、Acはさらに中心の蓮子と一重目の蓮子とを結ぶ凸線を彫り加える。本例はAa。

6275A(2) 6275型式は藤原宮式の線鋸歯文珠文縁複弁8弁蓮華文軒丸瓦。中房が高く突出し、弁区は平板で、外区外縁をめぐる線鋸歯文は粗い。中房の蓮子数・外区の珠文数・線鋸歯文数・弁の形状・外縁の傾斜の違いで、A～E、G～Iの8種に細分できる。Aは蓮子の配置1+4+12、外区の珠文数43、線鋸歯文数32。

以上のほか、凸鋸歯文二重圈縁複弁8弁蓮華文軒丸瓦6225型式の小片が1点、型式不明の軒丸瓦片が2点ある。

軒平瓦 (fig.14・15—3・4・5・6)

6685A(3) 6685型式は小型の珠文縁均整唐草文軒平瓦。逆十字形に簡略化された中心飾の左右に3回反転の唐草を置く。中心飾の基部上端が内区・上外区間の界線に接し、唐草第3单位第1支葉が内区・脇区間の界線に接す。軒丸瓦6313型式と組み合う。A～Dの4種があり、Aは瓦当が最大で、唐草文の各単位が他に比して短かめな点が特徴。大半は段顎で、曲線顎が少量あり、本例は段顎。

6691A(4) 6691型式は珠文縁均整唐草文軒平瓦。三葉状の花頭形中心飾の左右に4回反転の唐草文を置く。唐草文主葉と第1支葉の巻き込みがあまり大きくない。深い曲線顎。外区の珠文数・唐草の形状の差からA・Bの2種に細分でき、Aは中心飾の基部上端が小さく2又に分れ、瓦当がBより大きい。

6711A(5) 珠文縁均整唐草文軒平瓦。文様がきわめて変則的。中心飾が不明確で、唐草文も左右不整一だが、均整唐草文を意図して作ったもの。曲線顎。

6721C(6) 6721型式は珠文縁均整唐草文軒平瓦。三葉形の中心飾の左右に5回反転の唐草文を置く。外区に小さな珠文を密に配す。曲線顎。軒丸瓦6282型式と組み合う。A、C、D～Kの9種に細分できるが、いずれも文様構成は近似し、唐草文と珠文の位置関係でようやく識別できる。Cは中心飾の両支葉が上方に開き、脇区に珠文がないのが特徴である。

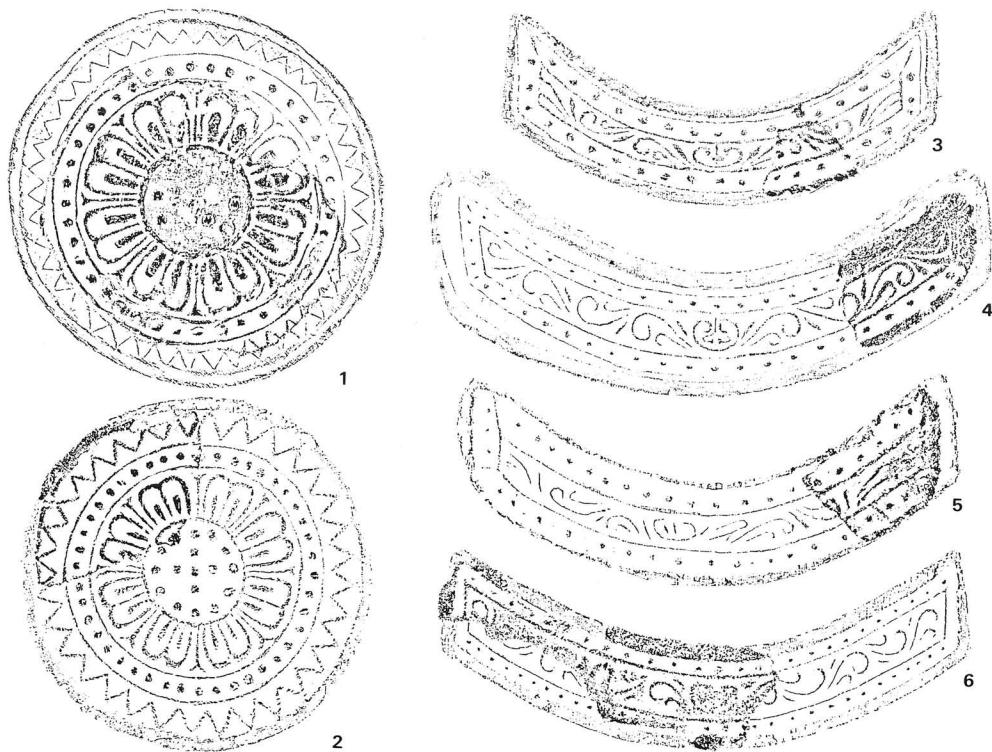


fig.15 軒瓦拓本

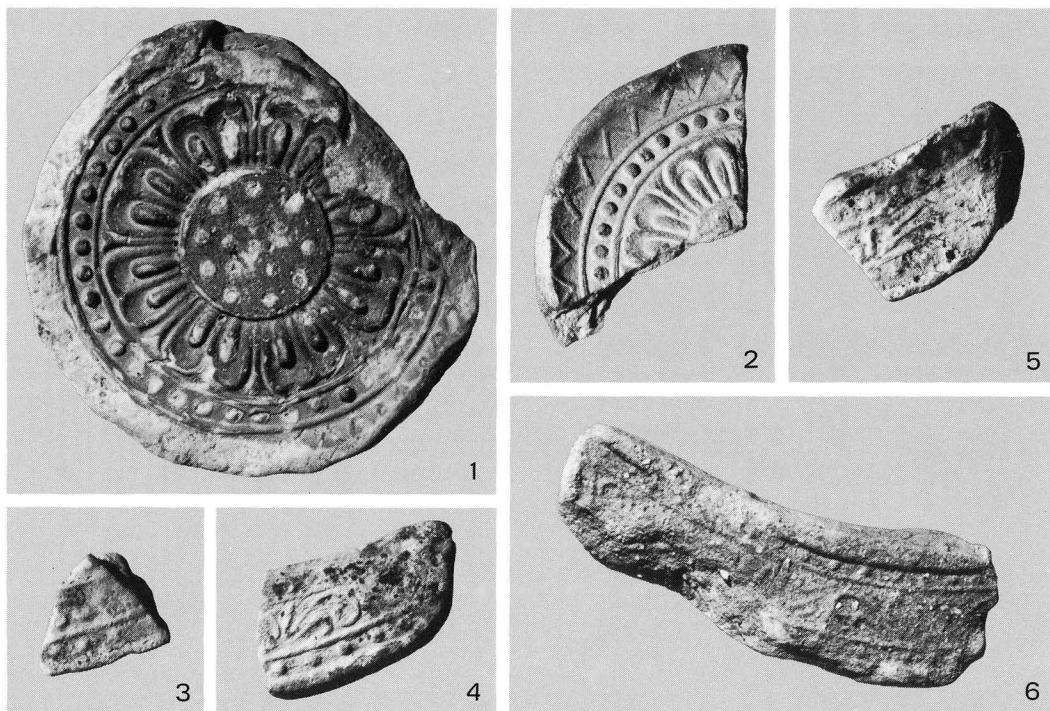


fig.16 軒瓦写真

以上のほか、二重圈線縁均整唐草文軒平瓦6663型式の小片が1点ある。

施釉熨斗瓦 1辺7cmほどの小片、凸面と側縁に透明釉と縁釉を施す。胎土は精良で、焼成は甘い。

丸・平瓦 丸瓦はすべて玉縁式。粘土紐巻きつけ技法で成形し凸面に横方向のカキ目を施すものが少量ある。他は粘土板巻きつけ技法で成形し凸面をナデるが、一部に縦位の繩叩き目が残る。平瓦は一枚作りによるものと桶巻き作りによるものがあり、いずれも凸面に縦位の繩叩き目を施す。

小 結 出土軒瓦の内、6685A・6691Aが朱雀大路東側溝の灰褐色粘土層より出土し、他は包含層から出土。6274Aa・6275Aが平城宮軒瓦編年第I期（和銅元年～養老5年）、6285Aが第II期（養老5年～天平17年）、6225・6663・6691A・6721Cが第III期（天平17年～天平勝宝年間）に編年される。6711Aも1970年の羅城門周辺地域調査時の所見から奈時代のものと考えられる。

今回の出土軒瓦は、すべて平城宮との同範型である。6711Aは宮内ではほとんど出土せず、主として平城京で使用された独自の瓦当文様をもつ軒瓦の1種である。ただし、羅城門近くの朱雀大路に面した築地跡周辺から、他の平城宮との同範瓦とともに出土していることからみて、官による生産品には違ひなかろう。京の造営に際し宮所用瓦とは別個に生産、使用されたものと考えられる。

以上の瓦は、遺構にともなうものが少量で、どこで使用された瓦であるかは不明である。調査地は宮に至近距離であるから宮に使用された瓦が含まれる可能性はあるが、京造営用の瓦もあり、朱雀大路に面した築地あるいは左京3条1坊の宅地内で使用された瓦とも考えられる。

(註) 記述にあたっては奈良国立文化財研究所が設定した型式番号を使用する。型式番号は下記の分類要領によって4桁の数字で表示する。第1位の数字6は奈良時代、第2位以下の数字は瓦の種類、A以下のアルファベットは細分された型式を示す。a以下のアルファベットは、瓦当範を彫り直したり、文様を彫り加えた場合、当初のものと区別するために用いる。

『平城宮出土軒瓦型式一覧』(奈文研1978)